

いま流通している『ももたろう』について



『桃太郎』 絵：齋藤 五百枝 / 講談社

昭和13年頃に発行された「講談社の絵本」をもとにした新装版。



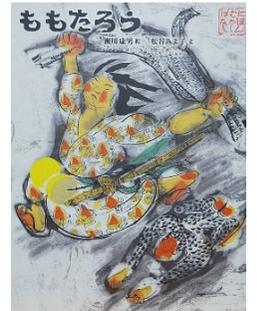
『ももたろう』 文：松居 直 画：赤羽 末吉 / 福音館書店

太平洋戦争後の民主主義平和国家の桃太郎像を伝えたいと、全国に伝わる桃太郎話から再話された。この桃太郎は鬼に対して「宝はいらない、お姫さまをかえせ」と要求。復讐の連鎖を断ち切る行動をする。



『ももたろう』 松谷みよ子・和歌山静子 / 童心社

ちょっと怠け者の桃太郎が描かれている。さらに、鬼ヶ島での戦闘場面ではほかの昔話の登場人物が助っ人として登場する。



『ももたろう』 松谷みよ子・瀬川康夫 / フレーベル館

桃太郎の生命力の強さが曼荼羅のように描かれている。この桃太郎も、怠け者だ。そして、旅の始まりから船に乗っている。



『空からのぞいた桃太郎』 作：影山 徹 / 岩崎書店

物語の進行をドローン撮影したような、視野の広い構図で描かれた桃太郎の物語。視点が変わると、物語の受け止め方も少し変わる気がする。

SF
ファン
交流会

【6月例会テーマ】 6月19日 14:00-16:00
(例会は 17:00 解散予定)

SF ファンのための
絵本サロン



【ゲスト】
藤田一美さん
(えほんや なずな店主)

オンライン de 6 月例会

絵本といえば「子どもが読むもの」とイメージしがちですが、実は絵本の世界は、SF マインドの宝庫！

私たちの SF 魂の原点は絵本にあるのかもしれない。

【テーマ】 SF ファンのための絵本サロン

【ゲスト】 藤田一美さん「えほんや なずな」店主

藤田一美さん えほんや なずな店主

1961年京都市生まれ。1978年空想科学幻想創作同人「零（ゼロ）」に入会。1981年京都芸術短期大学にて、みいめさんと知り合う。2016年10月につくば市にて絵本屋を開業。夫は植物育種家・作家 藤田雅矢

50 年前に子どもだったひとたちが懐かしむタイトル

現在も定番・ロングセラーとして流通している絵本です。



『ふしぎなえ』 安野光雅 / 福音館書店

階段をあがると上の階へ、またあがると、あれあれ、もとの階にもどっている。迷路に入っていくと、いつのまにか天地がさかさまに。絵の中だけに存在する不思議な世界に。1968年に福音館書店の月刊誌「こどものとも」として発行された。安野光雅のデビュー作。藤田雅矢が人生の最初期に「センスオブワンダー」を感じた絵本でもある。

『だるまちゃんとかみなりちゃん』かこ さとし / 福音館書店

こちらも1968年に発行された。この時代の輝かしい未来都市感が反映されているかみなりの国の様子（エネルギー放電塔、雲車、雷車、振動上昇装置、配膳移送機などなど）が楽しい。



ここ5年（えほんやなずな開業後）に感じていること

LGBTQ SDGs 発達障がい 紛争と平和 などなど社会問題に関しての作品が出版されている。



『ジュリアンはマーメイド』

ジェシカ・ラブ / 横山 和江 / サウザンブックス社

人魚に憧れる男の子のおはなし。男の子が人魚になってはいけないの？ になりたい姿、装いたい気持ちをそのまま認めてもらえる喜びをつたえる絵本。

『タンタンタンゴはパパふたり』ジャスティン・リチャードソン / ピーター・パーネル / ヘンリー・コール / 尾辻 かな子・前田 和男 / ポット出版

ニューヨークの動物園での実話をもとにした絵本。オス同士のペンギンカップルが石を温める行動をみて、試しに見捨てられた卵を与えたところ、みごとにヒナをかえすことに成功。幼い子どもにさまざまな家族の形を伝える一冊。欧米の保育園ではごく当たり前にも読まれているそう。



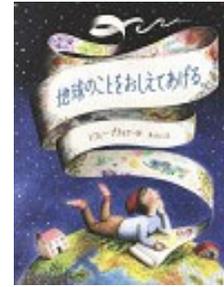
『ぼくはスーパーヒーロー アスペルガー症候群の男の子のおはなし』

メラニー・ウォルシュ / 品川 裕香 / 岩崎書店

子どもの成長発達には個人差があるものですが、診断され分類され、名前がつくことで対応しやすく支援を受けやすくなることもあります。ありのままを受け入れるため、理解を助ける絵本も出版されています。

『ごろうのおみせ』ごろう / 死後くん / 岩崎書店

ある日ごろうは学校をやめた。やめてお店をはじめた。○とか△を描くだけのお店をはじめた。学校にいけなくなる子どもは少なからずいます。学校ってなんだろう？学校行かないとだめ？そういう発想を軽々と飛び越えて、ごろうの「とことん」をきわめる姿はふしぎで、でも清々しいきもちになる絵本です。



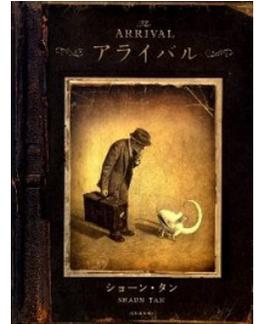
『地球のことをおしえてあげる』

ソフィー・ブラッコール / 横山 和江 / 鈴木出版

地球外生命体に向けた、地球のことを伝える長い長い手紙です。作者は、子どもたち一緒になって、この絵本を作りました。往年のアニソンのように「地球はひとつ 地球をまもろう」というメッセージが込められています。

『アライバル』ショーン・タン / 岸本佐知子 / 河出書房新社

言葉のない、絵だけの、グラフィックノベル。異世界のこのように、現実の投影でもある。見る人が自分の経験に照らすことで、受け取るものが一人一人違うと思います。



『ひみつのビクビク』

フランチェスカ・サンナ / なかがわ ちひろ / 廣済堂あかつき

（難民として平和な地にたどり着き）新しい環境におかれることの不安を「ビクビク」という姿に置き換えて表現した作品。自分のことで精いっぱいの子どもが、あるきっかけで他者にも同じ感情があると気づく様子をわかりやすく描いている。

『ぼおぼおおってどんないみ？』しんよんひ / 岩崎書店

言葉の通じない転校生がやってきた。お互いに言葉は通じないものの、なんとか友達になろうとする様子を描いた作品。分かり合えるには、相手の心を慮ること以上に、言葉が大事だと考えさせられる。



科学への興味 低年齢化？

インターネットの利用で、科学情報・画像・動画に簡単に触れることができる。科学知識も絵本で



『ダーウィンの種の起源』サビーナ・ラデヴァ／福岡 伸一／岩波書店

研究者からイラストレータに転身した著者による、古典をわかりやすく絵本にしたもの。親子で読むことを想定している。

『うまれて そだつ わたしたちのDNAと いでん』ニコラ・デイビス／エミリー・サットン／越智 典子／監修：斎藤 成也／ゴブリン書房

親しみやすく、愛らしい絵でDNAと遺伝についてを伝える絵本。



『ブラックホールってなんだろう？』

嶺重 慎 文 / 倉部 今日子 絵／福音館書店

いまわかっていないブラックホールの情報を、あたたかみのある絵で伝える。小学生向けの科学月刊誌「たくさんのふしぎ」の一冊。

想像力の翼が向かう先



『スモン スモン』ソーニャ・ダノウスキ／訳：新本 史 奇 / 岩波書店

ゴンゴン星に住む、こけしの様なマトリョーシカのような姿のスモンスモンの暮しを描く。おおきなポンポンのそばではヨンヨンがのび、ロンロンが実る。ストーンストーンを運ぶクロクロンに会い、フロンフロンはトントンにのったスモンスモンを運んでくれる。奇妙でくせになる世界。

『なずずこのっぺ』

カーソン・エリス／訳 アーサー・ビナード／フレーベル館

虫語の絵本。原題は『Du Iz Tak?』全編虫の言葉なのを、米国人の詩人アーサー・ビナード氏が日本語訳にした。「なずずこのっぺ?」「わっばどがらん」「フンレガとこたんた」「ずんずうう」など、絵を見て音を聞くとなんとなく会話の内容が推測できそうな。日本語版は文字のフォントにも遊び心が見てとれる。



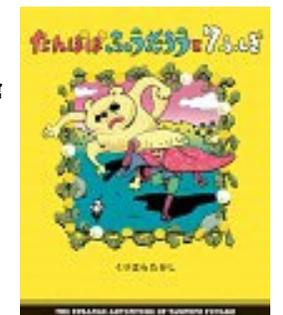
『ゲナポッポ』クリハラタカシ／白泉社

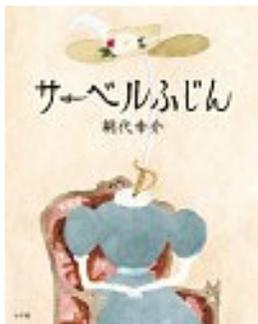
謎の生物「ゲナポッポ」。うどんの切れ端のようなその姿は「ゲナ」と「ポッポ」に分かれるらしい。ドーナツの穴が好物。世界に100億匹（匹と数えるのか!）存在するらしい。

『たんぼぼうたろうと7ふしぎ』

くりはらたかし／小学館

『ゲナポッポ』と同じ作者の、こちらは又旅姿のふうたろうが、ものけがはらで大暴れするお化けタヌキを退治する話。7ふしぎ妖怪を能力をうまく利用しての怒涛の展開に、拍手。たのしくすっきり爽快な妖怪絵本。





『サーベルふじん』網代 幸介／小学館

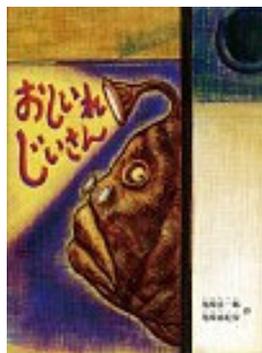
刀剣男子なるものが、流行していましたが、こちらは頭部がサーベルのご婦人です。前見返しには、夫人が住まう土地の地図。後ろ見返しには、夫人を取り巻く家族や使用人たち（人外もあり人の姿もあり）魅力的な世界観がうかがえます。

『サムとダイブ あなをほる』

マック・バーネット(文)／ジョン・クラッセン(絵)／

なかがわ ちひろ(訳)／あすなろ書房

おじいさんのちの庭で、サムとダイブが穴を掘る。下へ、横へ、斜めへ、また下へ。掘って、掘って、掘った末に。SFファンは『おーい、でてこーい』ってよびかけたくなりますよ。



『おしいれじいさん』

尾崎玄一郎・尾崎由紀奈(著・文・イラスト)／福音館書店

おしいれじいさんはチョウチンアンコウな姿をしている。寝具をとりだしたあとの押し入れの中で、夜通し浮遊している。住人と交流するわけでもなく、人間の暮しの道具で遊んでいる。懐かしくて変。

『そらからきたこいし』しおたにまみこ／偕成社

ある日、地面から少し浮いている小石を見つけました。なんだろう？図書館で調べても、浮かぶ小石のことはわかりません。ところが、身の回りにいくつも同じものが見つかるのです。拾い集めるうちに、小石がお互いくっつきあっていきます。繊細に描かれた絵と相まって、夏の夜に読むにはぴったりのロマンを感じる作品です。



『かべのすきま』中西翠／文 澤野秋文／絵／アリス館

ひとりぼっちの夜。かべの真ん中に突然現れた一筋のすきま。ひゅ〜と吹く風とともに、隙間から現れたのは、おもいがけない、にぎやかな存在。つい、その存在のペースにまきこまれるも「おじゃましました〜」と去っていった後の、安堵とさみしさが絶妙。

『マンマルさん』

マック・バーネット／ジョン・クラッセン／長谷川義文／クレヨンハウス

『サンカクさん』『シカクさん』に続く三部作の三作目。サンカクさんとシカクさんには足があるのに、マンマルさんは浮遊している。そういう設定の理由をいろいろ推測し想像して楽しんでいます。単純な造形だけれども、キャラクターの心の動きはけっこう複雑と思います。



『エイドリアンはぜったいウソをついている』

マーシー・キャンベル／コリーナ・ルーケン／訳：服部雄一郎／岩波書店

ウソは「いけないこと」のはず。でも、SF好きはわかっている。ウソは想像力の自由さの発露でもある。この絵本は、ウソの影にある、豊かな想像の世界を目の当たりに見せてくれていると思う。「うちには馬がいるんだよ」というエイドリアンの言葉を信じて、絵本の中に「馬」を発見してください。

『つきとうばん』藤田雅矢／梅田俊作／教育画劇

さいごに、つれあいの作品を。SF マガジン 2003 年 12 月号に掲載されたことから、絵本化のオファーがあり 2006 年に刊行されました。真っ暗な空に、種から育てた月と星を浮かべる世界の、父と子の 1 年間を描いています。

